



特42
864

坊物語



東照公の九男紹州
和歌山の祖頼宣
の子光貞の末の子吉宗
との其初老臣加納少監方
ありて時若氣の至りし腰元
沢野と云ふ者ゆへ人知れず
ぬひに沢野我往も必し

比翼と
ひて沢野と
親里の下の

女子の生
も一其子の
女子の生
は是を歎けり
兎角血氣治
らばと又不自
らばと又不自
路のへ成
一は母の歎
ぬひに重
身も



吉宗公少監の手前を憐れ
沢野の暇と云ふと盛
招かれ短刀黒附て送られ
跡内の兒子出産の後男
女を限らば是と證據ゆ名の出
と厚志の言葉と云はれ
は當座の御手當と云ふ金
多しと鬼の森
世の上の

母諸の
喜せし
程の
月端て身
と接添ふ念の
佛名を煙の
香はと云行て
泣き
生者矢
と云ふ
機
沢野
の送
て管
つ映の玉



國待ぬ
目どくさ要く

娘沢野
果一
早言

出

仰せ又
吉宗

今將軍とあらせぬ
近白地の物語
法沢勿ち悪念生
トかさん渡

酒
酔

酔
酔



忘れぬ
心斗の御佛手
向いのと勝手
料理と多拵柄
同村に住居る観音
院の徒弟法沢と云者此家の

うち来
つらく見て涙を
娘の今小指達者
あれが
打ちみて其後
りて短刀黒附
床り出産の後

体
落
お

我家
師匠観音院
毒害
まて昔



國傳

出

今將軍とやらせぬ
近白地の物語
法沢勿ち悪念生
かへん遊び

吉宗公
仰せ又

酒を
ちり

早十三回
娘沢野



忌成... 御佛手
向... のと勝手
み料理... 拵柄
同村... 住居... 観音
院の徒弟法沢... 者此家の

つらく見て涙を... 我孫
娘の今... 猶達者... 居
これ... 同... 年... 鼻
打... 其後... 娘沢野... 身
りて短刀黒附... 下... 此廣沢
成り出産の後... 是と證... 振... 名...

酒を
ちり
酔

師匠... 観音院
毒害... 一村...
我家... 成り
付... 大集...
短刀墨
體



修行と
賀田の浦
少石火と討殺
己が
衣類皆奪ふぬ附其所
小捨置法沢の法無賊の害せられ

山の形
伊賀筋
美濃衆衆
院と執権
職と定め
其身の徳
るの業物
座一金



其の身は賀田の浦を弄りて山に
赤川大膳山の内伊賀之助と云ふ事
主膳と云ふ人猶養源の事無茶
此の事を出て伊賀の者多し
彼引入下人法を集めると言ふ衆を院
更く直曲者三百餘人と引來させ法沢大い
大望の程迄きあわると
自から刺髪と
天坊と名号赤川大膳





東不着 山下山旅館を構へ既將軍吉原
 御目見へ願ひる將軍吉原公其和向より
 少くも寛へ有りて御内意ゆりて近日御目見
 有りて仰出され其頂の町奉行大岡
 越前守大いお登り如何ゆ夫坊が振舞
 怪舖と思われ御目見へるなり彼が実ふを乳さんと
 服心の即黨平井平三郎と以て紀刃廣沢村發そ
 村長と招き村中の人別をあらたしと後法沢
 見知り人觀音流の下僕久助を伴ひ
 て至急東へ戻りけり然ふ
 天一坊の斯とも知らず

家来 金子百兩
 付て 知行
 二百石
 二百石
 其金高不應ト
 て知行官禄
 二百石
 来せ



金の持太は天一坊が旅
 館へ入来る者益夜引と切
 愛ふ及で天一坊金子
 或方兩
 と棄
 ひら
 大いふ
 まるび
 て遊
 の内御目見

旅館
 あつて



有る
我

少くも柳三家の
拾遺の物語と山
も見へる大望と

即ハ紀元
主君越前守
あまうして天坊
と法沢小舟
多き人見知り
人下横久助の伴
由主人大岡殿



越前どの弄

が功を賞然
招きよせ久助と對立の後不隠

法沢の相違多く久助の志をよき事
おきあり 重早東使者を以て八ツ山の旅館のつら

明日と御登城ありて 拙者御取持仕

べしと有る天二坊是に南より大ひまき

明日と我が大望成就の時至さうと其明の

日其身の義を教給ひ餘り赤川山の内で初め供
数多隨ひ先大岡どのの屋敷に至りて越前どの

内はと天二坊とを閑敷屋敷を送り出せし時兼て密に居る久助對立の分を

大ひまきとさきさきと越前の守どの紀別廣沢村観音院の徒身強賊とすの

長十法沢
待と高

小



有る

御三家の
格式ゆゑの山
見の

又平井平三
即ハ紀房
主君越前守

一人より
君より

法沢小
多其人見知り

人下儀
由主人大岡殿

下
言上

越前どの弄

ガ切を賞然

を招きよせ入助を對立の後小隠

法沢小相違ひ久助おまゝを

おまゝあり 早東使者を以て八ッ山の旅館

明日を御豆城あへ

べしと有る天坊是

明日を我が大望成就の時

日其身の義を教給ひ

数多隨ひ先大岡どの

内はと天坊と

大いおまゝ



長本法沢
待と高

小



國時は天坊
 是を聞り
 血走
 眼み拳を
 握り我が大望を
 果えん是ま
 あり

者供扱
 下を呼
 組子の大勢
 赤川大膳山の内伊賀



今奉行が眼
 見え
 白刃の直砂を喰
 舟平井平三郎傍
 血を汚す
 衣類管を法
 前差出
 是る

之助美濃の兼宗院替時
 程に防戦松術を良
 争う天道の免
 其後罪の
 次第評定
 仕置
 実の悪人亡び善人栄え
 目出度御代とあり



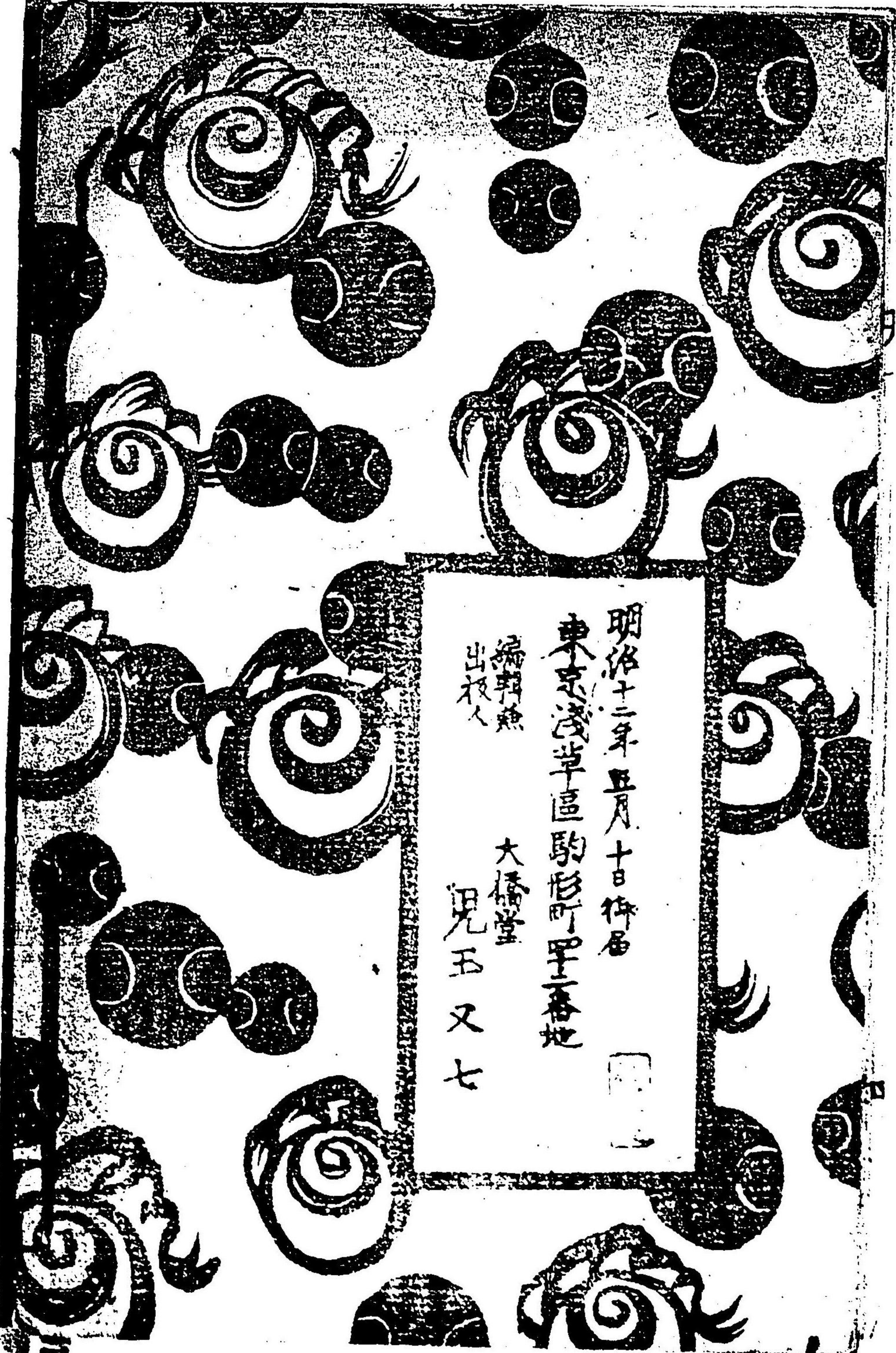
天坊
 是を聞けり
 血走し
 眼み拳を
 握り我が大望を
 果せんと是まは
 あり

者供推し
 下よを呼
 組子の大勢
 ちつて手ふた
 討つて天坊
 赤川大勝山の内伊賀



今奉行が眼み
 みて見頭と云れ
 こと残念あり
 白洲の直砂を喰
 有平井平三郎傍
 衣類管笠法派
 前差出
 女是を
 覚も
 餘人
 の者

之助美濃の衆衆院昔時
 程に防戦松術と見ま
 争う天道の免とらん
 終る纏目お扱られつ其後罪の
 次第評定
 仕置お
 目出度脚代とありふたり
 実の悪人立以善人栄え



明治十二年五月十日拜屆

東京淺草區駒形町聖喜地

編輯者
出板人

大橋堂

兎玉又七